

## 現代日本の中間階級精神構造

藤 田 チズ子

中間階級は、旧中産階級から経済的機構の变化にともなうて生まれて来た。彼らは私有財産をもたず、資本は自己の脳力だけと云う階級であり、資本主義の成長、独占資本の成立、官僚化の滲透とともに増大し、新中間階級の大量のホワイト・カラー労働者として社会に放出された。

そこで、ホワイト・カラーの分類を行なうと、官僚化された企業組織の中で合理化された一部分を受けもつ少数の管理的職業者がおり、彼らはホワイト・カラー層の上部、中部の地位にある。次に多数の専門的、事務的、公務、販売的職業者が存在し、ホワイト・カラーの中部、下部に属している。もう一つの分類として、同じ事務職のホワイト・カラーであっても、彼らの属している企業の規模に応じて意識状態が異なる故に、大企業のホワイト・カラー、中小企業のホワイト・カラーと云った区別もなされる。

中間階級を社会的にとられた場合、ホワイト・カラーは現代の資本主義の経営機構である経営層と工場労働者の中間に属し、組織の内部において媒介の機能を果たす。

マックス・ウェバーの官僚制論に照らしてみれば、ホワイト・カラーは、組織が細分化され形式合理化が行われ、官僚制的組織になって行く事の所産であり、社会的権威は、その組織からの借りものである。

ホワイト・カラーが急速に増大した理由として、安定した社会、強力な政府、大企業と官僚主義的機構、それに製造工業における機械化、分配事業の拡大、調整業務の拡大などが挙げられる。

經濟的に中間階級をとられた場合、収入源と収入額について分けられる。まず、収入源において彼らは賃金労働者とまさに同じ条件にある。次に収入額では1表から考察すると、過去においてはブルーカラーとホワイト・カラーとの經濟的差は大きなものであったが、これから先の日本の社会的状況を背景として、この兩者の給与の差は縮小される傾向にあり、この兩者の収入源と収入額においては労働者として質的に同様である。しかし、その他の相違点として、ホワイト・カラーはブルーカラーよりも比較的学歴が高く、特殊技能をもっている為、収入の量が相對的に高く、經濟變動に左右されにくく、安定性がある点で經濟的に異なった地位にあると云える。

中間階級の心理的な特徴として、過去の權威に依存し、賃金労働者と現実に大差がないにもかかわらず、同質とみる事を非常にこぼみ、大きな組織を背景とした權威に執着する。そして、社会的經濟的には労働者階級と同様であり、仕事として、自己自身も労働者階級の一部である事を肯定しながらも、又一方の精神においては上層階級と同様ならんと努力する。

次に日本の中間階級の生活状況を「月刊世論調査」の統計を中心として、ホワイト・カラー、ブルーカラー、農林漁業者、商工サービス業者の四種類の仕事別に比較して考察して行く。

#### 一、職業別に見た生活の状況判断

表2のA、2のBによるとホワイト・カラーの生活の満足度が高く、暮しむきも「楽になった」と感じる者が多い。これに対してブルーカラーは満足度が一番低く不満足度が高い。又暮しむきも「苦しくなった」と感じる者が多い。これは、前にも記した様に經濟的にはホワイト・カラーとブルーカラーにおいては大きな賃金の差がないと云える限り、ブルーカラーにとっては經濟的なものよりも、むしろ、社会的、精神的な不満が多いのではないかとみられる。この場合、労働組合の影響力も大きいと思われる。

#### 二、職業別にみた生活程度の自己判断

3表の様にホワイト・カラー層は自己判断においても、中位に自分が位置していると判断した者が九四%にも

違する。すなわち、生活意識が平均化した事を示す。

### 三、職業別にみた今後の生活見通し

4表から、今後の生活見通しの中で、一番楽観的な見方をしてゐるのがホワイト・カラー層である。その理由として、経済的には年功序列制度により給与は安定して高くなり、社会的にも会社に属している事により地位が守られている点が挙げられる。

では、この様な中で不安、不満はどの様なものであるか、次の統計より見てみる。

### 四、職業別にみた生活上の不満

5表によると、ホワイト・カラー、ブルーカラー、ともに「将来の経済的不安」が一番強いのである。それは、将来職場をうばわれる機会が多いため、その第一の理由に挙げられるものが定年制度である。六十才以上で仕事をもっている老人の職業の内容は6表の通りである。

6表の様に、ホワイト・カラーが定年後まで働く機会は少く、その理由として、合理化され、個人の能力に期待されず、他の職業に変わらうとする場合も、長年の間つちがわれて来たホワイト・カラー意識により、抵抗や不安を感じ、又身体的にも不可能な点が挙げられる。これは、ホワイト・カラーの生活の大きな問題点である。

ホワイト・カラーの生活は他の職業者に比較して、不満が少なく、自分でも、一般的生活を営んでいると云う考え方が多いが、物質欲、生活上欲が強い傾向にあり、いわゆる地位競争、体面競争をひき起こしている。

5表の統計で、ホワイト・カラーで、生活に不満を感じている者、感じていない者が約二分されている。この事から、ホワイト・カラーの生活の根底には、一方では彼らを増大させた要因である社会的安定と、それにもとづく生活上、すなわち経済向上、地位向上等があり、他方ではこの社会的安定によって築かれた彼らの大きな安心感、それにともなう無気力、無感心、あきらめ、満足が存在している。この両者の感じ方のウェイトが数字によって表わされたものと考えられる。

日本の家族は第二次世界大戦後大きな変化を遂げたが、この変化にいち早く順応して行ったのがホワイト・カラー層である。そのホワイト・カラー層は現在どの様な家族構成、意識、期待をもって生活しているかを職業別に比較してホワイト・カラー層の特徴、精神状況を考察する。

現在一番望まれ、又現実にも一番多い家族構成は親子四人の家族構成である。その理由として7表の産児制限をした理由をみると、「生活上の為」、「子供に高い教育をつけたいから」と云う冷静な合理的な生活計画がたてられている。この答は特にホワイト・カラー層に一番多く、自己の安定、生活の安定と云う基盤からなり立っているのに他ならない。すなわち、彼ら自身、自から一定の生活のサイクルを行使しているのである。そのサイクルの一つである子供に対する教育への関心度は8表から見られる様にホワイト・カラー層が当然一番多い結果になっている。

次に職業別夫婦の役割期待を考えますと、9表で見られる様に、ホワイト・カラーの妻の期待は内面的行動、心情が強く、家庭中心教育中心である事を期待している。いわゆるマイホーム主義の形となり、夫に対して外的行動、心情をあまり期待していない。ホワイト・カラーの妻の家庭作りは、夫とすべて同等の役割の家庭を望んでいるのである。これに対して10表の様に、ホワイト・カラーの夫は妻に対して、外的行動、心情を望んでいるのが特徴である。夫の仕事の良き理解者であり、夫の親を大切に、祖先の祭を期待し、それから後、家庭内の仕事を希望するのである。この表を見て気づくもう一つのホワイト・カラーの展望としての役割期待の問題点は、妻の内面的希望と夫の外面的希望のギャップである。現在は夫の妥協と云う形でおさまっているが、このくい違いが長い間継続し、互いに自己の方向を追求していった場合、家庭において様々な不満、不服、反目がうっ積されて行くのである。すなわち、ホワイト・カラー層に家庭的危機が一番多く起こり易いのである。

#### 中間階級の意識

中間階級は、経済的、社会的にはブルーカラーと同質でありながら、その精神状態、意識において、階級的優

位の立場にあると自認している。そして、その概念はマス・コミにより一般に広められ、その上に彼らは確固たる自信とともに安穩としている。その階級内での細分化された地位を得るために力をうばわれ、心理状態は自己の地位を無視して、自己の将来あるいは上の階級に近ずいたり、自己をおいたりする。その様な原因により、階級意識が発達せずに、その源動力は常に自己を中心に注がれている。すなわち、自己にとっての社会、家庭、会社、政治であると言ふ目的によって生活し、自己に埋没して行くのである。

#### 中間階級の仕事と意識

日本のホワイト・カラーと会社との関係の最大の特徴は終身雇用制度である。この終身雇用制は個人の能力よりも、その個人の働いた年月により経済、地位が保証される。この事は、個人の無能力化、無氣力化に通じ、又日本特有の序列意識を再生する。

仕事においても、ホワイト・カラーの仕事は官僚化された組織において、常に一部分であり、その一部分は、全く個人にゆだねられているのではなく、細分化された管理下におかれて自己の領域され失われつつある。この様に、何らか一定の目標に方向づけられ、完全に自己の形成する事柄をもたないホワイト・カラーは、主体性、創造力、個性が失われて行くのである。大きな組織のメカニズムにより、ホワイト・カラーは自己の役割が決定づけられ、役割とともに行動が決められる。これにより単調な毎日と規定された仕事が続くのである。そして、ホワイト・カラー層は、自己の保障、安定、すなわち熟練、権力、収入、地位を得たり、守ったりする為に、大きな権力、資本に依存し、遂には、彼らの生活、パーソナリティまで仕事に組み入れられてしまうのである。

#### 中間階級の政治意識

ホワイト・カラーの政治意識と云えば一口で政治的無関心と云える。ホワイト・カラーにとっては現在の機械、秩序が保たれていれば、民主主義でも社会主義でも良いのである。彼らにとって政治は、自己の立場と、経済の代表であり、その権力の優勢な方につけば良いのである。

### 中間階級の意識傾向

現代のホワイト・カラーの様に、一定の規格化されたメカニズムの中では、その一端における細分化された職場で、単純作業、能力主義から地位競争、体面競争、反目、不安、年功序列への不満が生じ、現代社会のメカニズムの縮図の部分が多数存在する家庭においても、そこでの役割、期待がまち受け、生活におわれ、仕事におわれているので、常にこうした緊張の状態が続くと、まず、自己の生活が疲労と云う形で自覚されて行く。この様な社会下、労働条件下におかれた、ホワイト・カラーの疲労は、大企業、巨大社会の部分品化、それにとりなり主体性の喪失、生活手段からの離脱とともに疎外感に変化して行く。

疎外感とは、様々な傾向によって表わされる。まず、会社、仕事よりの疎外、単調な毎日、決定された社会からの一時的解放、一時的刺激を求める。この事は、決定された社会への反抗、疑惑による、手相、占いなどの非合理性への逃避、又、ギャンブル、セックス、又は社会不満による快樂主義的、刹那主義的な傾向を示す。

この刹那主義的な傾向、社会秩序の混乱は社会危機感を増大させ、再び巨大社会への還元として、官僚的なフアンタズム化の傾向を示す可能性も在る。

又、他の形として、社会、仕事からの疎外感とは、その関心の方向の比重を家庭に向け、仕事は、個人にとって生活の手段にしか過ぎないと自認する様になる。

個人の疎外感の克服の手段として、家庭に期待をかけ、特に子供の将来、その保障としての教育に力を入れる様になる。ここでは、疎外感とは、新たに、子供にその機構の一部として、出世させる事が社会に還元され、その機構をより強大なものにして行くのである。

一面、自己においては、自己の立場を確認する為に、一定規準を見出そうとする。その時利用されるのが、マス・コミである。そのマス・コミによって作られた一定規準からの疎外感、孤独、不信、あるいは作られた目標価値、認識が、現代人の思想、考え方、習慣に不安定さを加え、自己確認、自己認識の機会を失なわせる要因と

もなっている。

そして、常に自己確立、自己認識が行えないホワイト・カラー層は、これから将来においても、第二次的な存在にかなり得ない可能性をもつ。

この事は、日本人の生き甲斐、人生感からもうかがわれる。日本の現代人にとっては女性も家庭、子供に生き甲斐を求め、男性は仕事と事業に生き甲斐を求めているのが一般的パターンで、他に男女とも二〇%あまりが「生き甲斐なし」と答えている。「現代の日本人にとって、人間が生けると云う事は、生きる事自体に価値を見出すのである。」その様に何ら信仰も主義、信念をも持たない日本人にとって、生き甲斐とは、一般的パターン化された人生が目標となり、その中で生きる事であり、日本人にとって労働は手段ではなく、生き甲斐の構成部分である。その様なホワイト・カラーに休息があるとすれば、仕事と家庭の間にある一時的な、楽しみ、ゆとりであろう。ホワイト・カラーにとって仕事からの疎外感も、一般的生き甲斐からはずれてしまうと云う疎外感より恐ろしくないのである。その社会、仕事、家庭からの疎外、倦怠は仕事、家庭、生けると云う三つの組み合わせられた生き甲斐によってバランスをとり合っているのである。

しかし、これから先の生き甲斐をもたないホワイト・カラーは自己で新たな生き甲斐をさがし得ずに、これからマス・コミが定義するのを、疎外、倦怠の中でまっっているのである。この事からも、ホワイト・カラーの機構からの脱出は不可能であり、常に二次的存在になってしまっているのである。

中間階級の政治的立場の展望として、城戸浩太郎氏は四つに分類している。一、新中間階級の全体あるいは一部はたえず数的に増加し、権力を増してゆく。そして、その当然の帰結として政治的に独立した階級に成長し、次代の支配階級となる。二、新中間層は数と力を増加しつつけるが、独立した階級として成長するまでにはいたらず、他の二大階級のバランス・オブ・パワーになる。三、新中間層は、社会的性格でも、政治的行動でも実質的にブルジュアジーであり、そうあらうと努める。それは特に身分階層として強い。四、新中間層は、古典的マ

ルキシズムの公式に従う。彼らは、重要な点では、すべてプロレタリアートと同質であり、遂には社会主義政策に参加する。としている。

この政治の展望は、これからの中間階級の意識傾向の展望を導く事にもなり得る。

# 「現代日本の中間階級の精神構造」

1 表 実在者基準内賃金

S. 44.6 「中央労働時報」賃金事情調査より

	2 2 ~ 2 3 才		4 0 ~ 4 1 才		5 0 ~ 5 1 才	
	基準内賃金	平均勤続年数	基準内賃金	平均勤続年数	基準内賃金	平均勤続年数
大 卒 職 員	37,330 (円)	0.7 (年)	97,959 (円)	16.2 (年)	133,129 (円)	23.0 (年)
短 大 卒 職 員	35,124	2.1	94,010	18.0	123,827	24.8
高 卒 職 員	35,008	4.2	77,645	19.4	99,281	24.5
高 卒 労 務 者	34,051	3.5	67,900	15.9	75,779	19.3
中 卒 労 務 者	33,411	5.0	61,130	17.4	69,164	21.3

注 男子対象



2表 生活の状況判断

S・44.10「月刊世論調査」より

2-A

現在の生活に 職業	N	十分満足している 一応満足している	まだまだ不満だ きわめて不満だ
農林漁業者	1648	58%	41%
商工サービス業者	1438	63	35
事務系被傭者	2898	61	35
労務系被傭者	2665	52	47

2-B

S・45.9

5.6年前と比べた 暮らし 職業	N	楽になった	同じようなもの	苦しくなった	不明
農林漁業者	3,447	30%	44%	21%	5%
商工サービス業者	2,968	32	46	18	4
事務系被傭者	4,997	34	44	15	7
労務系被傭者	4,213	27	46	20	7

3表 職業別にみた生活程度の自己判断 S・45.9

生活程度の自己 判断 職業	N	上	中の上	中の中	中の下	下	不明
農林漁業者	3,447	1%	7%	55%	26%	8%	3%
商工サービス業者	2,968	2	12	60	19	4	3
事務系被傭者	4,997	1	12	63	19	2	3
労務系被傭者	4,213	0	3	50	33	10	1

※ 2表～7表「月刊世論調査」より

4表 今後の生活見通し

S・45.9

今後の生活 見通し 職 業	N	よくなる	同 じ 様 な も の	悪くなる	わからない
農 林 漁 業 者	3,447	32%	42%	7%	19%
商工サービス業者	2,968	39	41	6	14
事務系被傭者	4,997	43	41	4	12
労務系被傭者	4,213	37	42	6	15

5表 生活上の不満

S・45.9

生 活 上 の 不 満 職 業	N	将来に備え るだけのゆ とりがない のが不満だ	世間一般の 生活が向上 してとても 追いついて ゆけないの が不満だ	衣食住など の最低生活 も十分みた されていない のが不満だ	自動車やク ーラなど次 々にほしい ものが出て 来るのにど うにもなら ないのが不 満	いずれの不 満も感じて いない
農 林 漁 業 者	3,447	27%	23%	8%	11%	45%
商工サービス業者	2,968	26	15	7	6	55
事務系被傭者	4,997	31	14	8	10	48
労務系被傭者	4,213	35	22	13	9	39

注 PTAのため100%をこえる

6表 60才以上で仕事をもっている老人の職業

S・44.10

職業をもっている	農 林 漁 業	商工サービス業	自 由 業
45%	19%	11%	2%
事 務 系	労 務 系	内職、その他	持っていない
3%	7%	3%	55%

7表 産児制限をしたい理由

S・45.5

産児制限を したい理由 職業	N	生活 を向上 させたいから	子供を 教育につ めけるため	生活が 困るから	生活の 使宜上	家が せまい	母体の 健康	そ の 他	不 明
農林漁業者	263	23%	16%	17%	15%	0%	21%	5%	3%
商工サービス業者	392	21	19	10	16	4	21	8	1
事務系被傭者	571	28	22	8	8	5	23	5	1
労務系被傭者	592	25	15	20	9	7	18	3	3

8表 子供の教育に対する関心度

「現代家族の役割構造」より

無理しても子供の教育のために出来る だけ経費をふりむけたことが 職業	N	あ る	な い
自営商工業主	96	66.7%	33.3%
ブルーカラー	85	58.8%	41.2%
ホワイト・カラー	156	79.5%	20.5%
無職	46	63.0%	37.0%

9表 妻の夫にたいする役割期待

「現代家族の役割構造」より

夫の 職業	I 内的行動領域 生活費を多く入 れる子供を可愛がる 家事不干渉 暴力しない 家事分担	II 外的行動領域 異性関係をもた ない 飲酒をしない 仕事に熱心 賭事をしない	III 内的心情領域 妻への思いやり 相談相手 教育熱心 家庭の中心 夫婦中心	IV 外的心情領域 家事に干渉しな い 計画性ある生活 家事の理解 政治、社会に関 心
職業勤務者	1	4	2	3
労務勤務者	1	3	4	2
自家営業者	2	4	1	3
その他	1	2	3	4

10表 夫が妻にたいする役割期待

<div>職</div> <div>業</div>	<div>I 内的行動領域</div> <div>やりくり、経済的協力 子供を可愛がる 夫の世話 家庭の整理整頓 家事に熱心</div>	<div>II 外的行動領域</div> <div>夫の身内との交際 祖先の祭 夫の親を大切に する 異性関係をもたない</div>	<div>III 内的心情領域</div> <div>夫への思いやり 大切な話しあい 子供の教育に熱心 夫に従順</div>	<div>IV 外的心情領域</div> <div>身だしなみのよさ 夫の仕事の理解 夫の交際に理解 計画性のある生活</div>
職員 勤務者	3	1	4	2
労務 勤務者	1	3	2	4
自家 営業者	2	1	3	4
そ の 他	2	1	4	3